

やまなみ園の木々も美しく色づき、ようやく秋の訪れを感じられるようになりました。本日同窓会会長 様のご臨席のもと、「自然いっぱい 夢いっぱい 笑顔いっぱい」の山形市立大曾根小学校が、創立122周年を迎えられますことは、四十七名の子どもたちと教職員みんなの大きな喜びです。心より御礼申し上げます。

さて、本校の歴史をひもとくと、明治7年2月、上反田村安養寺の上反田学校から始まります。その後、現在の場所に校舎が建てられ「大曾根尋常小学校」となったのは、明治三十四年十月二十日でした。その開校の日から、今日まで122年という長い年月が流れました。今の校舎に改築されたのは、昭和四十八年で、今からおよそ50年前になります。グラウンドの土手は、当時のPTAの方々の奉仕作業で作られたそうです。また、大きな池と、四季折々に美しい日本式庭園「やまなみ園」や築山も次々に整備され、現在の学校になったのです。

明治三十四年の開校以来、本校は六千名を超える卒業生を輩出しています。私たちの先輩方が地域の方々と一体となって、大曾根小の伝統を築き上げてくださいました。

昔の大曾根小学校の児童はどんな学校生活を送っていたのでしょうか。ある先輩が思い出を語った文を読んでもみます。今から五十五年前の卒業生です。「私たちの学年は男子二十一名女子十三名計三十四名のクラスだった。アポロ十一号の月面着陸を図書室のテレビで見た記憶がある。給食は、牛乳ではなく低学年の時はまだ脱脂粉乳だった。まずくて飲めないといっている、冷めて表面に膜ができてますますくなった。チーズも給食で初めて知った。みんな「消しゴムだ」と誰も食べ

なかった。夏になると学校にまだプールがなく、上反田の沢で泳いだ。冬は常明寺の山でスキー教室があった。スキーをかついでいだけで疲れた。たくさん思い出があり、同級生は中学校を卒業するまでずっと一緒に仲間だった。「これは味噌づくりでお世話になっているヤマニ醤油新関徳次郎さんの小学校のころの思い出からでした。次に、昭和29年度卒業の佐藤さんはこのように振り返っています。「村立だった大曾根小学校に入学したのは昭和24年、終戦まもない大変な物不足の時に、当て継ぎの服、お下りの教科書、布製のカバン、履き物は草履だったろうか。戦後とはいえ、ジープが通れば上手に這いつくばり、飛行機の音がすれば爆弾が落とされるのではと、怖くて物陰に隠れたことを思い出す。当時は小学生をも当てにしての田植えや稲刈りのための休みもあった。食べるものがあれば生きられる、そんな思いの強かった時でも明日への希望があり、決して心は荒んではない、そんな小学生時代でした。」

このようにその時代その時代、先輩達が一生懸命に勉強をしたり友達と遊んだり運動したり、また、時には大変な思いをして学校生活を送っていたことがわかります。

大曾根小学校は、地域の方々に支えていただきながら学ぶことのできる「地域とともにある学校」です。「自然いっぱい」の恵まれた環境のもとで、米作り、味噌造り、里芋作りなどの栽培の学習、また、町探検等の地域学習でも様々な方々にお世話になり、貴重な体験活動に取り組むことができています。

ずっと見ていってくれる桜の木々に囲まれた自然の中の学舎、子どもたちの成長を温かく見守ってくださった保護者の皆様と地域の皆様、そして、「郷土を愛する風土」が本校の発展を支えてくださっていることを実感しています。

私たちは、大好きな大曾根小学校の伝統を受け継ぎ、大曾根に誇りを持ち、夢に向かって未来を拓き、たくましく生きる子どもを育てて参ります。それが、未来を見据えた新たな大曾根小学校の文化創りの一歩になると考えます。

これからも、ますます地域とともにある学校の実現に向けて、教職員一同努めて参ります。本日ご臨席をいただきましたご来賓の皆様はじめ、地域の関係各位の皆様には、今後とも変わらぬご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます、式辞といたします。本日は、誠にありがとうございました。